

洗足学園音楽大学 パーカッションコンサート P

2020年12月9日(水) 18:30開演 18:00開場

洗足学園 前田ホール

ご挨拶

本日は「パーカッションコンサートP」にご来場いただき誠にありがとうございます。
ございます。

新型コロナウイルスの影響により、前期の演奏会は全て中止という状況でしたが、後期より制限をかけながら少しずつ再開という流れのなか、学生たちはお客さまに演奏を聴いていただくために練習を重ねてまいりました。2重奏から13重奏まで彩り豊かなプログラムを存分にお楽しみいただけましたら幸いです。

「演奏者にとっての拍手は恵みそのもの！」これまで多くの音楽家が温かい拍手によって育てられてきました。音楽会というのはそうした人とのつながりや成長を感じさせてくれる場なのだとあらためて実感しております。コロナ禍により様々な制約を強いられながらも頑張った学生たちにどうか温かい拍手をお願いいたします。そしてこの音楽家の卵たちが今後も時代や環境に適応できる力とスキルを身につけ、苦境を乗り越え前へ進んでいってくれることを心から願ってやみません。

まだまだ油断できない日々が続いております。1日も早い収束と皆様のご健康と安全を心よりお祈り申し上げます。

打楽器アンサンブル 企画運営責任者 石井喜久子

△新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。
- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

P.アンドレアソン／ティンプレイ- 打楽器四重奏のための

Per Andreasson // Tinplay for percussion quartet

大西 悠斗(学4) 前田 歩都(学2) 北山 絢萌(学2) 八木 優弥(学2)

曲 目 解 説

E.セジュールネ／ディパーチャーズ

Emmanuel Sejourne(b.1961)// Departures

小川 友李江(学1) 川崎 友仁(学1)
※授業内で実施したオーディション合格者による

水野 修孝／指揮者と8人の打楽器奏者のための「鼓」

Shuko Mizuno(b.1934) // "KO" for conductor and 8 percussion players

指揮：岡田 知之（本学名誉教授）

東 廉悟(学4) 松田 紗枝(学4) 石川 歩(学3) 前田 伶弥(学2)
大塚 愛美(学2) 天谷 芽生(学2) 近藤 寛斗(学2) 林 拓海(学2)

E.ノヴォトニー／クロス ～学部一年生による～

Eugene Novotney(b.1960)//cross

阿南 杏佳 大野 紗楽 小川 友李江 川崎 友仁 熊谷 彩夏
小山 梓 佐山 果凜 柴田 貴丸 柴田 瑠美 芳賀 俊之
廣木 太陽 宗像 桃子 山野 智広 渡邊 拓斗 渡辺 優生
江口 和輝 椎名 萌

野本 洋介／十六夜-Izayoi- マリンバ四重奏のための

Yosuke Nomoto(b.1981) // Izayoi for Marimba Quartet Op.21

松田 紗枝(学4) 石川 歩(学3) 近藤 花音(学3) 佐藤 綾香(学2)

吉松 隆／アトム・ハーツ・クラブ・カルテット Op.70 より I,III,IV

Takashi Yoshimatsu(b.1953) // Atom Hearts Club Quartet Op.70 I,III,IV

池本 羽奈(学3) 石川 歩(学3) 近藤 花音(学3) 佐山 果凜(学1)
※授業内で実施したオーディション合格者による

D.ギリングハム／打楽器アンサンブルのための協奏曲

David Gillingham(b.1947) // CONCERTO for Percussion Ensemble

大西 悠斗(学4) 池本 羽奈(学3) 近藤 花音(学3) 佐竹 絵磨(学3)
天谷 芽生(学2) 岡澤 七海(学2) 近藤 寛斗(学2) 佐藤 綾香(学2)
林 英希(学2) 林 拓海(学2) 古橋 優実(学2) 前田 歩都(学2)
村上 愛佳(学2) Piano：東 廉悟(学4)

岡田知之 プロフィール 指揮者と8人の打楽器奏者のための「鼓」 指揮

1936年生まれ、1960年東京芸術大学を卒業、NHK交響楽団打楽器奏者を'92年まで32年務める。その間'63年日本最初の打楽器アンサンブル「東京パーカッションアンサンブル」主宰、70年国立音楽大学兼任講師として日本の音楽大学で最初の打楽器アンサンブルを設立、'75年「岡田知之打楽器合奏団」結成し文化庁芸術祭優秀賞、第15回音楽之友社賞、日本レコードアカデミー賞などを受賞、
'80年洗足学園音楽大学に打楽器オーケストラを中心とする独自の打楽器アンサンブル結成し今日の名物コンサートを確立。国立音楽大学教授、洗足学園音楽大学教授・学部長、札幌大谷大学客員教授などを歴任。
現在、NHK交響楽団理事・団友。公益社団法人日本吹奏楽指導者協会（JBA）会長。日本打楽器協会会長。音楽大学オーケストラフェスティバル実行委員長。洗足学園音楽大学名誉教授。

企画運営責任者 石井 喜久子
指導教員 石井 喜久子 井手上 達 野本 洋介 古川 玄一郎 村瀬 秀美
照明 岡田 勇輔 合奏授業助手 八木澤 知里

オンライン履修者 櫻井 秀悠(学2) 田村 奏帆(学2) 石井順也(学1) 楊 宜達(学1)

P.アンドレアソン／ティンプレイ- 打楽器四重奏のための *Per Andreasson // Tinplay for percussion quartet*

Per Andreasson(ペル・アンドレアソン)はスウェーデン出身のロックドラマー・ロックシンガーである。また作曲家、クラシックパーカッションリストとしても活動しており、今回演奏する「Tinplay」はジャンルに囚われず活動する彼らしい作品と言えよう。

曲名にある「Tin」とは缶を意味している。また他にも鉄パイプ、車のブレーキパッド、金属片などといった本来楽器とされていないものを楽器として演奏する。

曲調もクラシカルな打楽器アンサンブルとは異なっており、幾何学的なポリリズムとロックのビートが融合した作品である。

緻密なポリリズムの面白さ、強烈なグルーヴ、そして多種多様な打楽器の魅力を感じていただけたら幸いである。

(4年 大西 悠斗)

E.セジュールネ／ディパーチャーズ *Emmanuel Sejourne(b.1961)// Departures*

作曲者の E.セジュールネは、1961年にフランス中部に位置するリモージュで生まれた。作曲家兼打楽器奏者。彼の音楽は、西洋のクラシック音楽とロックやジャズなどのポップカルチャーの両方から影響を受けており、打楽器以外の曲も多数作曲している。現在はストラスブル音楽院打楽器長を務めている。Departures は 2005年に作曲された。この曲は大きく分けて二つのセクションで構成される。前半部分は主に中低音域からなる、悲しくも豊かなコーラルが続く。その後情熱的で技巧的なカデンツァを経て、セジュールネらしいリズムミクな後半部分へ突入。後半に登場するフラメンコを想像させる変拍子のリズムは、この曲をさらに華やかに彩り、曲は終盤を迎える。

(1年 川崎 友仁)

水野 修孝／指揮者と8人の打楽器奏者のための「鼓」

Shuko Mizuno(b.1934) // "KO" for conductor and 8 percussion players

この曲は1974年12月に作曲者の水野修孝が当時指揮をしていた千葉大学管弦楽団の打楽器セクションのために書かれ、翌1975年1月13日に千葉大学オーケストラ定期演奏会で初演された。

水野修孝の作曲に対する方法論と理論付けには、自主、自立性(autonomy)が求められ奏者間相互の反応により五線記譜法の枠にとらわれず生きた音楽の生成、約束事を持った集団即興音楽がある。音楽表現の潜在能力(potentiality)にいかにか切り込むかが作曲者の意図するところで、演奏者への課題であろう。

「序」「破」「ポリリズム」「急」「結」の5つの部分からなる。「いよー」「はー」「とーとー…」なる気合、気迫を込めた声、歌舞伎に於ける「なりこまやー」「おとわやー」なる掛け声を用いられ、「破」においては奏者全員が入り乱れてステージの上を走り回り任意の打楽器を乱打する指示があったり等、和のエネギーが詰まった作品となっている。

今回は元NHK交響楽団打楽器奏者で、本学の名誉教授でもある岡田知之先生の指揮でお届けする。

(岡田知之打楽器合奏団40周年記念コンサート プログラムノートより一部引用)

(4年 東 廉悟)

E.ノヴォトニー／クロス *Eugene Novotney(b.1960)//cross*

「cross」は打楽器コースの中で「打楽器アンサンブル」を履修している1年生のみで構成され、毎年違ったテーマによる演出が楽しめる演出です。

この曲はE.ノヴォトニーにより作曲されたアンサンブル曲で、ソロパートとアンサンブルパートに分かれております。本来はスネアドラムなどで演奏されることが多いですが楽譜上使用する楽器や人数は指定されていません。その為、本日使用する楽器やテーマ、演出は1年生が考え、演奏しております。今年のテーマは【学校生活】です。

私たちはコロナウイルスによって通常の学校生活をしばらく送れていませんでした。現在も感染者は増加傾向にありオンライン授業と対面授業の並行ですが、皆の「早く元どりの学校生活を送りたい」という強い想いも込めてこのテーマに決定いたしました。今回は学校にあるモノや声などの日常音によりアンサンブルを繰り広げます。日常に潜む「モノ」の持っている

音や響き、音色を一年生皆で研究いたしました。「どんな音がするのか」に注目して、楽器を使わない近現代的な打楽器アンサンブルをお楽しみください。

突然ですが皆さん、【学校生活】といえど何を思い浮かべるでしょうか。眠たかった授業、賑やかだったお昼の時間、熱中した部活動、いつも遅刻してくる人や常に寝ている人。どこかクセのある先生など皆さん色々と思いつくイメージがあると思います。皆さんが一度は絶対に経験したことのあるような場面をふんだんに曲中に散りばめております。「今はどんな場面なのか」にも注目して頂ければ幸いです。どうぞ最後までまでお楽しみ下さい。(1年 江口 和輝)

野本 洋介／十六夜-Izayoi- マリンバ四重奏のための *Yosuke Nomoto(b.1981) // Izayoi for Marimba Quartet Op.21*

本学講師である野本洋介先生は、1981年生まれ千葉県出身。東京藝術大学器楽科卒業。打楽器奏者且つ作曲家であり、現在読売日本交響楽団と横浜シンフォニエッタのメンバーである。

この曲は、同じく本学講師である高田亮先生率いるグループ「at Tacca 打」のコンサートのために2018年に作曲、初演された。マリンバ2台をそれぞれ連弾する四重奏(2台8手)である。

「いざよい」とは「ためらう」「躊躇する」という意味の「いざよう」が名詞化したもので、満月である十五夜に比べて月の出がやや遅いことから、月がためらっていると見立てたことが始まりであるらしい。曲は幻想的な響きから始まり、和風な旋律を主題とした一種の変奏曲となっている。(4年 松田 紗枝)

吉松 隆／アトム・ハーツ・クラブ・カルテット Op.70より I,III,IV

Takashi Yoshimatsu(b.1953) // Atom Hearts Club Quartet Op.70 I, III, IV

作曲者の吉松隆は1953年生まれの日本の作曲家。1960-70年代のロックを彷彿させるこの曲はプログレッシブ・ロックを弦楽四重奏で演奏するモルゴア・クアルテットによる委嘱作品である。

曲のフルネームは「Dr. Tarkus's Atom Hearts Club Quartet」であり「ビートルズの『サージェント・ペッパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』にEL&Pの『タルカス』とピンクフロイドの『原子心母』とイエスの『こわれもの』を加え、それを手塚治虫の『鉄腕アトム』の十万馬力でシェイクした…」というのが由来である。(ASKS Orchestra HPより引用) プログレ風アレグロ、バラード風アンダンテ、間男風のスケルツォ、スラップスティック(ドタバタ)風プギウギの4つの楽章から本日は1、3、4楽章を演奏する。(3年 石川 歩)

D.ギリングハム／打楽器アンサンブルのための協奏曲

David Gillingham(b.1947) // CONCERTO for Percussion Ensemble

1996年にDavid R.Gillingham氏がランカスター高校打楽器アンサンブルの委嘱で作曲。大まかな打楽器の分類から「膜質打楽器」「木質打楽器」「金属質打楽器」の3つを取り上げ、随所で効果的に用いられるピアノと共にまとめられた楽曲になっている。

この曲は序奏と4つのセクションから作られており、完全4度で上行する4音と短3度で下行する1音からなる「5音の動機」が楽曲全体を構成している。

第1楽章『Membranes(膜質)』は「5音の動機に基づく5つのリズムパターン」と「さまざまな形で5音の動機を奏するティンパニ」という2つの特徴を持ち、楽章を通して膜質打楽器のみで演奏される。続く第2楽章『Woods(木質)』はマリンバカルテットのまろやかな音色の大きさを活かしており、5音の動機は4つのバリエーションを持つテーマに発展する。他の木質打楽器はマリンバの動きの趣を深めるために使用される。『Metals(金属)』の輝かしい音は第3楽章で取り上げられ、チャイム・グロッケンシュピール・クロテイルが主導権を握りさまざまな形で5音の動機の響きを表す。最終楽章『Finale』は5音の動機を変奏した活発なテーマによるアンサンブルで、先に述べた完全4度で上行する特徴を残しつつ完全5度で下行するパターンが追加されている。第2楽章のテーマが2つ目のモチーフとして再び登場し、『Finale』のテーマに基づいた大フーガが続く。部分的な再現部と拡大形のコーダが演奏され曲は幕を閉じる。(スコアのプログラムノートより引用)

(3年 佐竹 絵磨)